

魔王は勇者の腕の中

1

その世界には、勇者と魔王がいた。

勇者は世界を救う存在。

魔王は世界を滅ぼす存在。

勇者は魔王を滅ぼし、魔王は勇者に倒される。

それが世界の理（ことわり）。

そのはずだった。

2

魔王の住む北の世界は、いつでも雪に覆われている。

魔王は、窓の外の白をぼんやりと見ながら、城の自室の寝台で犯されていた。

犯しているのは男で、勇者だ。

勇者は性器を魔王の中に埋め、熱い肉壺を堪能している。

魔王は、ただ揺さぶられるがまま。

反抗するたびに陵辱され、歯向かう意志も気力も奪われた。

なぜ、こんなことになってしまったのか。

魔王は育ての親の魔女に聞かされ、全てを知っていた。

3

魔王の住む城から離れた南の方角に、大国があった。

そこで、ある年、王に二人の子どもが生まれた。

一人は正妃の子どもで、朝に生まれた。

もう一人は側室の子どもで、前日の夜に生まれた。

王専属の占い師は、二人の子どもの未来をこう予言した。

正妃の子どもは世界を救う勇者となり、側室の子どもは世界を滅ぼす魔王となると。

王は、側室の子どもを殺すよう、部下に命じた。王は、自分以外を愛せ

ない人間だった。

しかし、王の側室は王の部下に懇願し、子どもを生かすように計らった。

部下は、王の側室の子どもを殺さず、北の森に捨てた。たまたま、北の森に住んでいた魔女が、王の側室の子どもを拾い、育てることになるとは知らずに。

4

魔王を拾った魔女は、魔王に魔術を教えた。

魔王は飲み込みが良く、幼くして魔女の教えを全て習得した。

魔女は魔王を深く愛したが、死期が訪れようとしていた。

息を引き取る直前、魔女はこう警告した。

いつか、この城に勇者がやって来て、魔王を倒すだろう。

その勇者は、魔王の実の弟だ。

勇者は勇者でありながら、生まれながらに闇の心を持っている。

勇者を救えるのは魔王だけ。

魔女は言い残し、息絶えた。

そして数年後のことだ。

勇者の証である大剣を持った青年が、魔王の城に現れたのは。

5

勇者の眼差しは魔王にどこか似ており、血縁があることはすぐに分かった。

勇者は、魔王の配下たちを次々と斬った。彼らは何もしていないのに、ただ怯えていただけだったのに。

魔王は勇者を止めようと魔術を使ったが、効果は薄かった。たちまち、勇者は魔王のところに辿り着き、ねじ伏せた。

魔王は、自分も殺されるのだと覚悟した。

勇者は云った。

「俺のものになるなら、お前の大切なものの命を奪うのはやめる」

魔王は勇者の正気を疑った。
だが、要求を呑むしかなかった。
その日、魔王は勇者に三晩にもわたって陵辱された。

6

勇者は時たま、心情を語ることがあった。
生まれたときからずっと、心の何かが足りない。
欠けているように感じていたと。
今、魔王と出会えて、幸せだと。
そういうときの勇者は微笑んでいた。
勇者のことが憎くてたまらないのに、ふと見せる表情に、魔王は見入ってしまう。
この感情をなんと呼べば良いのか。
育ての親の魔女は教えてくれなかった。

7

その日、南の方角から馬車がやってきた。
馬車には、南の大国の国印が記されている。
馬車からでてきたのは、正装の男だった。
男は、魔王と勇者のいる城に向かって、高らかに宣った。
「勇者よ、魔王を滅ぼしたまえ。さもなくば、勇者の母親を殺すと王が仰っている」
王は、魔王を倒すためなら、自分が世界で最強であるためなら、妻の命さえなんとも思っていないのだ。
このとき、勇者は機嫌が悪かった。
魔王と情事をしていたのを邪魔されたからだ。
勇者は魔王から体を離すと、大剣を手に取り、寝室の外に出た。
「だめだ、勇者」
魔王は裸体のまま、寝台から抜け出て、勇者を止めようとした。
勇者が王の使者を殺してしまえば、勇者の母親の命がないことを理解し

ていたからだ。

勇者は魔王の心臓の上を触り、嗤った。

「待っている。すぐに抱いてやる」

勇者はそのまま、王の使者を斬り殺した。

8

王の占い師は、間違っていた。

実は、正妃の子どもが魔王で、側室の子どもが勇者になる運命だったのだ。

つまり、本当は魔王が勇者の魂を持ち、勇者が魔王の器となるものだったのだ。

今更分かったところで、もう手遅れだ。

今宵も魔王は勇者に犯され、ねじ伏せられ、泣き叫ぶ。

大切なものを奪われ、掌の上で弄ばれ、逃げ惑う。

魔王の悲鳴こそ、勇者の至上の幸福。

魔王は、寝台の上で、助けを求めるように手を伸ばす。

その手を掴むのは、勇者しかいなかった。

了